

話しことばの獲得に関する臨床的考察

—人的環境について—

池 山 和 子

(1985年10月15日 受理)

A clinical study of speech acquisition

—about social surroundings—

Kazuko IKEYAMA

はじめに

子どもが話しことばを獲得するためには、子ども自身が備えていなければならない条件と、環境側に必要な要因の2つがそろふことが必要だという点は現代では異論のないところと思われる。このうち、話しことばそのものに関する研究あるいは子ども側の条件に関する研究はかなり詳細な点まで積み上げられてきているように思われる。これに対し、環境側の要因とそれが発達に及ぼす影響については十分な検討がなされていないように思う。

言語治療領域の中には、話しことばコミュニケーションをとらえる2つの見方がある。1つは現象を輪切りして見る見方で、送り手と受け手の話しことばのやりとり、あるいは送り手と受け手の間に想定することのできる音波の流れを含むコミュニケーションの鎖を問題にする。やりとりの不備あるいは回路中の切れ目をつきとめ修復することが臨床活動の内容となる。もう1つの見方は発達的な見方で、子どもが話しことばコミュニケーションを獲得していく過程を観察する。正常な母国語コミュニケーションの獲得に成功した子どもとどうも獲得することのできなかつた子どもの生育過程を環境ぐるみ比較検討することによって、ことばの獲得に必要な条件や要因を知ることができる。臨床的にはその子どもに欠けていた要因を発見しそれを補い与えることによって話しことばの獲得を期することができる。

Johnson, W. は吃りの診断起因説や、ことばの問題箱の概念を提唱したが、これは子どものことばを異常とみなすこと、あるいは疑いをもって見ること自体がことばの環境として好ましくないものであることが、指摘されていると言えよう。Johnson の考え方の特徴として子どもの話しことばと、コミュニケーションの様相を子どもの実際の生活の中でとらえている点がある。臨床活動それ自体も子どもの生活の一部であり、臨床家と子どものコミュニケーションも対象の一部として問題とせざるを得ない。筆者はこのような Johnson の考え方を基点として臨床活動を実施し子どもが

ことばを獲得していく過程をいくつか観察することができた。その結果ことばの獲得に及ぼす人的環境の重要性を知ることができたのでこれを報告したい。

臨床活動

A) 活動の基本的な形態と方針：物的、人的な条件から、子ども、母親、臨床家の3者が同一の部屋で同じ時間を過ごす形になった。即ち子どもと臨床家の活動を母親が部屋の一隅で眺めて過ごすこともあり、母親と臨床家が話をしているあいだ子どもが傍でひとり人で遊んでいるということもある。子どもの行動について当室では指示、叱責はしないよう母親に伝えたが、3者がその場の状況に応じて自由に働きかけあうことができる。このような形態において、母親と子どもの自然な関係のあり方をしばしば観察することができ、また子どもに対する望ましい接し方を母親にその場で具体的に説明できるという点では便利であった。子どもが遊びながら母親の存在を気にしたり、母親と臨床家間に交わされる子どもに関する話の内容を子どもが聞きとるといった点もあった。父親、きょうだいその他の関係者が同伴した場合も殆どの場合が同室で過ごした。

基本的な方針としては、まず何よりも子どもが自由にのびのびと楽しい時間を過ごすということをも第1の目標と考えた。これはこのような状態が子どもの真の姿を知るのに役立つと考えたからである。具体的に何をするかは子どもによって異なり、子どもの様子を見ながら適宜変更していった。この上で対象となっている子どものことばの獲得のために意図的に用意することが必要、あるいは役立つと判断された活動を用意した。

B) 事例：具体例として3つの事例を挙げる。ここに挙げた事例はほぼ同時期のもので、終結後すでに10年に近い年月が経っている。事例Aは最近の様子がわかっているが、他の2事例については連絡先が不明で最近の様子を知ることはできなかった。

事例A：初診時3歳4カ月の女兒で、父母と3歳年長の姉との4人家族である。

主訴：会話ができない。言えることばは赤ちゃんことばが10語くらい。片言のみで続けて言うことができない。

生育歴：予定より2週間遅れて出産。お坐り、這い這い、歩行などの発達には特に問題らしいことはなかった。赤ちゃんの時はお話をあまりしない、とても大人しい子どもであった。泣くのは大声であったが、いるんだろうかと思うくらいひとりで大人しくしていた。姉とはずい分違って手のかからない子どもであった。一歳ころからバンバン、マンマ、ママなど言い始めたが、その後あまり変化がなかった。一歳6カ月くらいで昼間のおしめがとれた。赤ちゃんのころはよだれをあまり出さなかったが歯が生えた後、2歳ころからよく出すようになった。人見知りはしない方で誰にでもついていく。熱性のけいれんを起こしたことがある。指さしは2歳ころから始めた。

初診時の様子：(母親からの情報によると)母親の言うことはたいていわかっている。話をしたい気持はあって身振や動作で表現する。勘を働かせていることもよくある。食事に時間がかかる。歯

が悪くかむことは苦手。水洗トイレがきれい。デパートなどではトイレの近くへ行くのも嫌がる。水洗の音が嫌いだと思われる。今でも大便のしつけができていない。姉も遅くまでかかった。全体に無口。1人でTVを見ている時、雰囲気まきこまれ声を出しているが人がいると声が小さくなる。絵本で、母親が嫌になるくらい何回も指さして言わせることがある。本人は何も言わない。ことばの言い直しをさせると嫌がる。母親が遊びの相手をしようとしても嫌がることもある。一番好きなのは姉。近所の子どもたちとままごと遊び。年下で赤ちゃん役をさせられ反発はしているらしいが遊んでいる。言語能力発達質問紙で基礎3歳、理解2歳半、表現1歳レベルの項目はできている。(当室での様子)「空をとぶものはどれ?」という質問に答えられる。同程度の質問で答えられないものもある。絵を見てその物の名まえを日本語にはなっていないがそれらしい抑揚をつけて声を出す。身振りをしてみせることもある。ことばになっているものとしてカーシアン、バイバイ、ブー(自動車)、ニャンニャン、テエビ(TV)、レーゾーコ、キイン(きりん)が得られた。構音は未熟で音節も分化していない。ぬいぐるみ、シール、壁の写真の3つを同じ“パンダ”であると人に知らせる。できあがったものをほめると声をあげて喜び、母親に知らせる。時々臨床家の顔を見てにっこりする。ストローを唇で支えることが難しい。吹くことに夢中になるとよだれをたらす。電話の玩具で話をしているように「アーウー」と声を出す。

経過：初めの3年は原則として2週間あるいは3週間に一回通室してもらい、遊戯療法的なアプローチを行った。以下入園までの様子を母親からの情報と当室での様子に分けて記録から抜粋する。

	母親の報告	当室での様子
初診から2W	大人をからかったり、驚かしたりして喜ぶようになった。家では臨床時よりいくらか声大きい。	自分から室内の玩具を次々に手にとって遊ぶ。動作に合った擬音や手にとった物の名などを、傍らから声かけすると同じ抑揚の声を出してオーム返す。
	(母親への指導) ことばを教えようと言わせるのではなく、臨床場面でのように子どもが自分から自然にオーム返しをするようにことばをかけることを心がけると良い。	
前回より3W	通室するようになって何ともいえず明かなくなってきた。来ることをとても喜んでいる。家でも伝えたことは身振で表現することが多い。A児の相手をする姉が嫉妬していじめる。	臨床家の方からの遊びを発展させるような働きかけが少ないと、遊びが次々変化する。よだれが多い。
2W	コーヒーが欲しい時、A児がことばで要求しても母にわからない。コップやビンを持ってくることよって通ずる。	前回までに比べ遊びながら室外の物音を気にすることなく遊びに集中するようになった。
	ことばの一般的指導法について書かれたパンフレット“ことばの学習”を渡す。	
2W	パンフレットを読んで、父母ともとても良い勉強になった。父親の考え方が変わった。母親は他人が聞けばわざとらしく1つの単語をくり返し聞かせるように心がけている。	ことばが2つつながる。(シェンシェイ、イイ?)。A児の言ったと思われることばを臨床家がくり返すとすぐまたそれを初めの時より明瞭な構音でオーム返す。

- 1
2
W
L
- お菓子を買い時でも「先生（臨床家）の分」と言っ
てとり分ける。ここをととても重大に考えている。
- 会話の中で2つの語がつながっていることが時々あ
る。知っている物の名まえは不明瞭でも声を出して
何か言おうとする。息を強く吹くとよだれがとぶ。
-
- 2
W
- 人を見ると誰にでも自分から話しかけるようになっ
た。おしゃべりの量が増えた。他人からもそう言わ
れる。母親にはたいてい意味が通じ、通ずることが
動機づけになっていると思う。通じなくてかんしゃ
くを起こすことがずい分減った。最近おぼえが早
い。以前は何回も何回も言ってやっと覚えたが今は
2, 3回言えば覚える。家でも母のことばの語尾を
くり返す。近所にことばのことをからかう子どもが
いる。食べ残したあめの袋を臨床家に持っていくと
言っていて忘れてきた。
- 臨床家がカセットを操作しているのをじっと見てい
て、後で自分でボタンを操作してカセットをとり出
す。ままごとと道具を1つずつ取り出しながら臨床家
に名まえを言わせる。玉ねぎの皮をむく手つきをし
てみたり、キュウリを注射器のようなかっこうで片
腕にあてる。(家の注射器の玩具とかっこうがよく
似ている。) 電話の玩具で簡単な問いかけをすると
とても喜んで返事をする。問いかけが難しいとす
とその場を離れる。絵本（こぐまちゃん）を見せ
ると臨床家の指をつかんで絵本の上に押しつけその部
分の名を言わせる。
-
- 2
W
- 「ママ、ダメ」など2語文が出るようになった。鹿
児島でいう“いなば”になった。友だちとの間でこ
とばが相手に通じないとかんしゃくを起こしてけん
かになる。5までそれらしい発音で数を数えるよう
になった。3は数としてわかっている。デパートの
トイレを使うことができるようになった。
- こぐまちゃん絵本を自分で出して指さし、臨床家の顔
を見る。粘土を切ったりお湯をわかしてお茶を入れ
る等のままごとの動作を楽しむ。自分がことばを言
っても相手にそのことばが通じないことがあるとい
う不安が感じられる。自信のあることばは大きな声
ではっきり言う。よだれを出さずに息を長く吹く。
夢中になっている時によだれをたらすことがある。
-
- 2
W
- ままごとで赤ちゃん役をとっていかにもそれらしく
甘えたりする。自分から指さして物の名を尋ねるこ
とがある。仲間はずれにされるとそこにあったもの
をこわし、ありったけの悪口を言って逃げる。こと
ばは、ある程度つきあった人、友だちにはけっこう
通じる。順調に伸びている。
- お店やさんごっこ、A児が店の人になりお金の受け
渡し、店員がものを書きつける仕種などのまねをし
て遊ぶ。
-
- 1
M
2
W
- ここ1ヵ月ほどのあいだに2語文になった。2語文
くらいの文なら家族の言うことばをまねる。よくオ
ーム返しをする。一週間ほど前からトイレがきちん
とできるようになった。けんかの時自己主張をする
ようになり、泣いて逃げてくることをしなくなった。
休み中も大学へ行くのを楽しみにしていて何かとい
うと「先生、先生」と先生にひっかけていた。
- 2語文で話すことが多い。数字を数えるような声を出
しながらメチャクチャ文字を書く。ことばを話す
ことそのものを得意に感じているようにしゃべる。
「お帰り」と言うのと「イヤ、イヤベー」と答える。臨
床家に直接でなく、母親に怒りを向ける。よだれを
時々たらす。Jargonをしゃべる。休み中海へ行っ
た時の出来事を母に助けられながら身振り動作で伝
える。
-
- 3
W
- 姉が勉強しているのを聞いて「カキクケコ、タチツ
テト」と言えるようになった。よく遊んでいる者ど
おしでは通じる。家ではよだれをたらすことは殆ど
ない。
- 遊びの中で臨床家がA児のつもりと違ったことをす
ると変な顔をしているが、抗議することなくそのま
まにしている。母がカキクケコ・タチツテトを言わ
せようとしたが嫌がって言わない。10分に1回くら
いよだれをたらす。
-
- 1
- この一週間ほどとてもよくおしゃべりをするように
- 初めに「シェンシェイ」と呼びかけ、その後メチャ

- 3
W
| 3
| 3
| 3
| 1
M
| 3
| 1
- なった。2つあるいは3つことばがつながる。お姉ちゃんたちと身振り手振りではなく話を通じている。母が答の例をいくつかあげていくと当否をはっきり答え、そういう形で話がわかるようになってきた。
- クチャことばで長く話しているかのようにしゃべる。途中ネェとかネという音を入れる。3語文が出る。問いかけに短いことばではっきり答え、会話が成りたつ。
-
- 一時も家にいない。仲の良い友だちができ、よく遊ぶ。姉をほめるととてもくやしがる。お手伝いをよくしたり、ほめられようとする。単語なら知らない人にもわかるくらいはっきり言える。長く続いたことばになるとわかりにくくなる。母は大抵わかる。負けず嫌いで1つ叩かれたら3つ叩き返さないと気が済まない。何事もそんな風。遊びは姉のあとをついて回っている。
- ホイッスルをピッピッピと吹いてみせるとすぐまねして同じ拍子で吹く。臨床家が遊びを楽しんでいないとA児も楽しめない。
-
- 1週間ほどことばがはっきりしなくなったことがある。母が相手をするのが少なかったためそのせいかもしれない。久しぶりに会った人から通じるようになったねと言われた。ここへ来るのを何より楽しみにしていて、「そんなことをすると連れていかないよ」と言うとピタと止める。
- 「〇〇(自分の名)ネ, コップネ, キュッテ」という言い方で自分がコップを割ったことを報告する。こぐまちゃん絵本を自分で読むまねをする。知っている単語を言う。
-
- よくしゃべるようになった。子どもたちとよく会話している。友だちには何とか通じさせようと努力する。母からよりも姉や友だち遊びの中でことばを覚えるようである。母のことばのオーム返しはよくする。A児の言うことばで名詞は母にわかるが、動詞がわからないことがよくある。友だちからよだれをばやしたてられたことがありそれ以後自分でも気をつけている。
- 臨床家がA児の指示と違ったようにすると怒った声を出して再度指示する。絵本をひろげてメチャクチャことばで読むかっこうをして楽しむ。メチャクチャことばの中に時々知っている単語を入れる。ストーリーを使って吹く遊びを自分からする。大人の意向を読んでそれに従おうとする様子が減ってきた。臨床家にすねてみせる。
-
- 家の者にはよくわかるが初めて会った人は聞き返す。一日でも過ごせばわかるようになる。同じ年齢の子どもとよく会話して遊ぶ。通じなくてかんしゃくを起こして戻ってくるのがなくなった。姉が本を読むのを聞いていてオーム返しをする。近所の年上の男の子につつかかかっていく。母の仕草、口調を恥ずかしいと思うくらいそっくりまねる。近所の子との遊びで主導権を握れることはない。
- 臨床家から新しいことを誘うと不愉快そうな表情でのらない。ここでは自分が主導権を握るという様子をはっきり示す。
-
- よくしゃべる。相手にわがろうがわかるまいがペラペラしゃべる。人形をいっぱい出して1人で2役3役とってままごと遊びをする。TVでいじめられる場面では自分もこわがって泣き出す。感情をよく出す。姉が本を読むのを聞いていて知っている単語をオーム返しするがそういう単語が増えている。
- 「ニャンコハアカチャン, ニャンコジャナイ, ネットコ! (にゃんこという言い方は赤ちゃんことばで間違い, 猫と言いなさい)」「センセエダメネ」など感情をこめて言う。臨床家にはほんの一寸した身振りで自分の意志が通ずると考えている。本を読むまねをする時の外は Jargon がなくなる。
-
- 同じ年の子とよく遊ぶ。初めて会った子どもとその
- とてもよくしゃべる。人の反応を気にすることなく

1
M
3
W

日のうちに友だちになり、幼稚園入園対しいくらか気が楽になった。けんかの場面など早口で言わなければならない時、もつれて人に通じなくなる。新しく覚えたことばはきちんとと言えるが、昔から使っていた幼児語のほうがむしろ不明瞭。過去にあったことを報告した場合、母には全部わかるが父にはわからないこともある。自分の都合の悪いことは抜かして報告する。絵を切り抜いて紙芝居のようにしてお話をする。母、姉のことばのオーム返しをよくする。CM など TV でよく聞かれることばもよくまねる。口で負ければ手で向かっていく。幼稚園に対してはここへ来るのと同じに考えて楽しみにしている。同じことばが言えたり言えなかつたりすることが不思議である。気はとても強い。

一所懸命話しまくる。(平らになったよ、1個)(魚のごはんです。)(できたよハイ、食べるよ)などの文を話す。

友だちに対してもかなり自己主張ができるようになってきている様子から、幼稚園にも適応できるのではないかと思われたので、入園後は2・3か月の間をおいて経過観察を行うことにした。入園後の生活は母親の報告によると、初めのうち先生の指示を我が事として聞く態度が身につけていなかったこと、いわゆる“さばけた”子どもに強い調子でまくしたてられると気押されて引っこんでしまうらしいこと、そのことと関連して自分から友だちの仲間に入っていけないなどのことが多少の気か掛りとなっていたということであるが、一方園に行ってみるとそれなりに遊んでおり、先生にも積極的になつていき、そのうち仲の良い友だちもでき、小人数のグループなら自分から入っていくようになったということで、母親の心配もさほど深刻なものとはならず、外見上特に問題とするほどのことには気づかなかつた。家では近所の友だちや姉とけんかしながらよく遊び、おしゃべりし、理屈も言うようになり、年長組に上がる時には、園の新しい先生にも通じるようになっており、近所の人も家での母の行動を見ていてそれを話し皆わかってしまうほどおしゃべりをするようになったということであった。家庭でことばを言わせたり言い直させたりすると怒るが、正しいことばをかければオーム返しをし、そうすると正しい発音に近づく、またA児と同じ発音でしゃべると怒るということで、被刺激性が高く、通室時に母親には、表現しようとする意欲を損なわせないこと、おしゃべりをできるだけたくさんするように配慮すること、正しいことばを聞かせることを引き続いて心がけるよう指導した。看板の字などを自分からよく読んで欲しがり、格別教えたわけではないのにひらかなを自分で覚えてしまったとのことであった。就学前には自分の名まえを書くことができるようになり、発音も殆ど普通になり母親の心配は殆どないと言って良いくらい軽くなった。就学の数カ月前に父親が訪れ、A児はよく伸びているし園の先生からも心配ないと言われており安心な気持である一方A児が他の子どもと遊んでいるのを見るとまだ同じではなく、父親自身が(軽い)障害をもっており人一倍努力してきたので、自分の子にはそういう思いをさせたくない、と父親の気持を語られた。この時、臨床家の子どもとの接し方に少し甘すぎる点があると母親が感じているということを臨床家が知ることができた。幼稚園時代の当室のA児の様子は、話す文が次第に長くな

